

1982.09.19
1982.09.19

日中新大存旅立ち

国交10周年と鈴木訪中

鈴木首相の中国訪問(二十六日)が一週間後に迫った。教科書問題がようやくひと区切りつき、「日中友好の新たな十年」(外務省筋)へ向けての旅立ちである。しかし、教科書問題は、「友好」が口先やうわべだけのものではならず、しっかりと歴史の認識に裏付けられなければならないことを思い知らされた。中ソ関係正常化の動きにみられるように、中国外交も変化のきざしをみせている。首相の訪中は、「ムードの友好」から、お互いに冷静な判断に基づく「実務の友好」への節目となりそう。

冷静に見つめる中国
「友好二色に塗りつぶされ」からみれば、これまでが「友好二色に塗りつぶされ」てきた観のある日中関係だっただけに、中国国民の胸に残る傷の深さを思い知らされる結果になった。

それは、同時に、「国と国の関係で最も大切なのは、国民の心と心に結ばれた強固な信頼関係である」(七九年に訪中した際の故大平首相の講義)と言いな

ら、十年前の日中正常化で過去の処理はすっかり終わって、過去と安易に考えていた日本側の「すべりの友好」への警鐘でもあったといえる。この十年間の日中関係の進展にはめざましいものがある。相互人的交流は、七二年当時、年約九千人から、さからみて、教科書問題は、単なる一つのトゲにすぎない。自身、なんらかの意見表明

「実務友好」へ節目

「教科書」上すべりに警鐘

日中新大存旅立ち 国交10周年と鈴木-1982.09.19

この見方が、政府部内にはある。「ほうっておいた大変だが、化膿(のう)する前に扱ってしまえばどうということはない」というのが、「トゲ論者」の主張である。教科書問題で少々ゴタゴタしたとしても、日中関係の基本にはいささかの变化もないというわけである。

対立する意見がある。「外交的にすでに決着済み」の問題を、わざわざ取り上げるような必要はない。七百人もの中国人留学生が「あれほど深刻な外交問題に発展したのに、知らない。日本政府の最高責任者として、日中友好の原

をやる必要がある」鈴木首相自身は、どちらかといえば前者のようだ。首相は再三、記者団に「こちらからいってもいいよ。むこうから聞かれば(別だが)……」と強調している。

過去の反省明確に

とる過去の戦争への反省だけではない。激しい国際政治の波もかぶりつつある。先の第十二回党大会で、中国はソ連を「社会帝国主義」などと呼ばない。最近では、万里副首相が中ソ正常化の具体



新体制になって、金日成北朝鮮主席(右から2人目)を迎える中国首脳。右端が鄧小平軍委主席、1人おいて左へ胡耀邦書記、趙紫陽首相(UP Iサン)

し、台湾問題というやっかいな障害がある。日本の場合も、民間企業はあくまで採算を重視するし、他の開発途上国とのパランスから中国一辺倒の経済協力はずかしい事情があり、中国の期待通りに進んでいるとはいえない。中国が次第に、これまでの西側との開放政策の軌道修正を図り、ソ連との関係改善に重点を置く方向へ移ってきたのも、こうした背景によるところが大きいというのが外務省の分析だ。

わが国にとっては「友好ムード」のみが支配していたこれまでの「御祝儀外交」(由島雄雄・東京外大教授)から、お互いに相手の立場や事情を理解し合い、そのうえで協力し合うという新しい段階への脱皮が求められているといえる。

教科書問題が一応落ち着いた、具体的な懸案もない今回の首相訪中について、外務省首脳は「過去を忘れることなく、現実をみつめ、将来を展望することに意義がある」と強調する。言葉にしてしまえば簡単だが、問題は、そうした言葉をどこまで実現できるかだ(橋本 五郎記者)